

## 中唐から晩唐・北宋中期の文人の狂草観

松永, 恵子  
九州大学大学院比較社会文化学府

<https://doi.org/10.15017/4494597>

---

出版情報 : 比較社会文化研究. 16, pp. 35-46, 2004-10-28. 九州大学大学院比較社会文化研究科  
バージョン :  
権利関係 :

## 中唐から晩唐・北宋中期の文人の狂草観

マツ ナガ ケイ コ  
松 永 恵 子

### はじめに

草書は、凡そ秦末から漢初に興ったとされており、本来簡易敏捷に書くことから生じたと言われている。<sup>(1)</sup>漢では主に、隸書の筆法である波磔を具えた「章草」と呼ばれる書体で書かれており、その代表的な人物としては漢末の張芝<sup>(2)</sup>がいる。六朝になると、行草書で書かれた尺牘が貴族の間に往来された。そこで用いられた草書は「今草」と呼ばれるもので、独草体で書かれた漢の章草よりも自由な筆法で、連綿線も少し見られるようになる。その代表的な人物としては、東晋の王羲之や王献之がいる。中唐頃になると、章草、今草よりも、さらに字体をくずして連綿線を多くし、自由奔放な筆致の「狂草」が書かれるようになった。中田勇次郎氏によれば、狂草とは「二王(王羲之・王献之)の典型にこだわらないで、天真のままの解放された気持で書こうとする草書である<sup>(3)</sup>」という。狂草を書いた代表的な人物としては、張旭<sup>(4)</sup>や懐素が挙げられる。

「狂草」は、このように東晋の王羲之を正統とする伝統的な書から逸脱し、それ以後の草書に甚大な影響をもたらしたとして、中国書道史上重要な位置づけがなされている。張旭や懐素が活躍していた中唐頃から、その珍しい書風はもてはやされ、多くの詩人の詩に詠われた。北宋では、特に中期頃に活躍した黄庭堅の書に狂草からの影響が見られ、さらに降って明末清初の長条幅連綿書へと引き継がれていくのである。

このような草書の形成過程や、書道史上における狂草的な書風の流れについては、従来幾度となく述べられているのであるが、狂草が最ももてはやされた中唐から北宋時代にかけて、当時の文人や書家の間で狂草がいかに捉えられていたのかについては、まとまって論じたものは殆どないようである。中唐から北宋時代の文人達における狂草に対する批評を見ることにより、中唐から北宋へと繋がる草書の流れがより鮮明になってくるのではないだろうか。本稿では、特に中唐から晩唐までの詩人や、北宋中期の文人が狂草をどのように批評していたのかを中心に見ていくことにより、彼らの狂草観を考察してみたいと思う。

### (I) 中唐から晩唐の狂草観

まずは、狂草が書かれるようになった中唐から晩唐にかけて、「狂草」がどのように捉えられていたのかを把握することから始めよう。ここでは、狂草を善くしたと伝えられている張旭と懐素の書を中心に見ていくことにする。

#### ①張旭の狂草について

張旭<sup>(4)</sup>は、字を伯高といい、蘇州呉郡の人である。彼は陸柬之(585~638)<sup>(5)</sup>の子の彦遠の甥にあたり、この人物から筆法を授けられたとされている。初め常熟尉として仕え、後に左率府長史になった<sup>(6)</sup>ということが分かっている位で、彼の伝記は殆どわからないが、その書は中国書道史において、高く評価されている。張旭の書は、北宋にはなお多くのものが伝えられていたようである。北宋の米芾の『書史』には、張旭の書として「真跡四帖(旧五帖)」「賀八清鑑帖」「虎兒等三帖」「千文」が記録されている。また、宋の撰人未詳『宣和書譜』巻十八には、北宋末に御府に収蔵されていた張旭の草書として、「奇怪書」「醉墨帖」「孔君帖」「皇甫帖」「大弟帖」「諸舍帖」「久不得書帖」「徳信帖」「定行帖」「自覺帖」「平安帖」「承告帖」「洛陽帖」「永嘉帖」「清鑑等帖」「縑素帖」「華陽帖」「大草帖」「春草帖」「秋深帖」「王粲評詩」「長安帖」「酒船帖」「千文」の二十四帖が記載されているが、そのうち現存しているものはないようである。その他、「淳化閣帖」には「晩復帖」「十五日帖」が収録されており、張芝の書とされている「冠軍帖」「終年帖」「欲婦帖」「二月八日帖」も、実は張旭の書であるという説が米芾によって立てられているという<sup>(7)</sup>。現在、張旭の書として伝わっているものには、楷書の「尚書省郎官石記(宋拓本)」「(741年、縦19.9cm)、草書の「古詩四帖」(遼寧省博物館蔵、縦29.1×横195.2cm)(図版1)、草書の「自言帖」(714年)、草書の「晩復帖(淳化閣帖)」(縦26.1cm)などがあるけれども、その真偽は明確ではない<sup>(8)</sup>。

しかし、中唐頃から既に、張旭の名声は高く、彼の草書について記しているものは多い。例えば、杜甫の「飲中八仙歌」では、「張旭は三盃草聖として伝わり、帽を脱し頂を露わす王公の前、毫を揮い紙に落とせば雲烟の如し<sup>(9)</sup>」と記

している。ここにある八仙とは、張旭の他に、賀知章(659～744)<sup>(10)</sup>李璣(?～750)、李適之(?～746)<sup>(11)</sup>崔宗之<sup>(12)</sup>、蘇晋(676～734)<sup>(13)</sup>李白(701～762)、焦遂をさすが、彼らの生没年から見て、張旭も大凡開元(713～741)から天宝(742～755)にかけて生きていた人物であることが分かるだろう。

張旭の草書の書きぶりについては、唐の李頎が「贈張旭」(『全唐詩』卷一三二)の中で、次のように記している。

張公性嗜酒、豁達無所營。……時稱太湖精。露頂據胡牀、長叫三五聲。興來灑素壁。揮筆如流星、下舍風蕭條。……左手持蟹螯、右手執丹經、瞪目視霄漢、不知醉與醒。

張公、性、酒を嗜み、豁達にして営む所なし。……時に太湖精と称す。頂を露わして胡牀に據り、長叫すること三五声。興来りて素壁に灑ぐ。筆を揮へば流星の如く、舎に下れば風蕭條たり。……左手に蟹螯を持ち、右手に丹經を執り、目を睜いて霄漢を視、酔と醒とを知らず。

張旭は、酒によって興を奮い立たせ、叫び声を発し、その勢いによって筆を揮っており、運筆の様子は流星の如く速かったという。同じく唐の李肇が、『唐国史補』卷上の中で、「旭、酒を飲めば輒ち草書し、筆を揮うて大いに叫び、頭を以て水墨中に搥してこれを書す。天下これを張顛と為す。醒めて後自ら視て以て神異と為すも、復た得べからず<sup>(14)</sup>と述べているように、張旭は筆を揮う時に大声で叫び、頭髪に墨をつけて草書を書いていたようである。

このような張旭の書の革新性に対し、韓愈は「送高閑上人序」(世綵堂本『昌黎先生集』卷二十一)の中で、次のように述べている。

往時、張旭善草書、不治他伎。喜怒、窘窮、憂悲、愉佚、怨恨、思慕、酣醉、無聊、不平、有動於心、必於草書焉發之。觀於物、見山水、崖谷、鳥獸、蟲魚、草木之花實、日月、列星、風雨、水火、雷霆、霹靂、歌舞、戰鬪、天地事物之變、可喜可愕、一寓於書。故旭之書、變動猶鬼神、不可端倪。

往時、張旭は草書を善くし、他伎を治めず。喜怒、窘窮、憂悲、愉佚、怨恨、思慕、酣醉、無聊、不平、心に動くことあらば、必ず草書に於いてこれを発す。物を観るに、山水、崖谷、鳥獸、蟲魚、草木の花実、日月、列星、風雨、水火、雷霆、霹靂、歌舞、戦闘、天地事物の変、喜ぶべく愕くべきものを見て、一に書に寓す。故に旭の書、変動は猶お鬼神のごとく、端倪べからず。

張旭は、心に響いたことや、事物を観察した時に喜びや愕きがあれば、必ず草書で表現し、書き表されたものは率意の書であったという。

また、張旭の書法の由来については、唐の李肇が『唐国史補』卷上の中で、次のように記している。

旭言、始吾見公主擔夫爭路、而得筆法之意。後見公孫氏舞劍器、而得其神。

旭言う、始め吾れ公主の擔夫の路に争うを見て、筆法の意を得たり。後に公孫氏の劍器を舞うを見て、その神を得たり。

張旭は、始め公主の擔夫が道を争っているのを見て、筆法の意を得た。後に、娼妓の公孫大娘が劍器を舞うを見て、その神を得たという。これは、張旭が自己の書風の由来を述べたもので、彼の書と伝えられている「自言帖」(714年)(図版2)にも、同様の内容が記されている。

張旭の草書は一般に、杜甫の「公孫大娘の弟子の劍器を舞うを観る行」の序に「昔者吳人張旭、草書を善くし、……嘗て鄴県に於いて公孫大娘が西河の劍器を舞うを見る。これより草書長進し、豪蕩感激す」とあるように、教坊の妓女公孫大娘の劍舞を見てその秘訣を得たと伝えられている。「劍器を舞う」ということについては、那波利貞氏に「蘇莫遮考」(『紀元六百年記念史学論文集』、1941)の論考がある。那波氏によると、「劍器の舞」とは甘肅省で行われた舞のことで、長さ一丈余りの彩帛の両端を、握りやすいように各々一結びにし、右端の結び目を右手で持ち、左端の結び目を左手で持って、活発な舞踊動作をし、中央の带状の彩帛が空気の抵抗を承けて弓の如く膨れるような動作を伴った巾舞の一種であると解釈している。張旭は、この巾舞の曲線美から草書のヒントを得たと伝えられている。後に、張旭の筆法は、「折釵股(転折の用筆法)<sup>(15)</sup>とも呼ばれるようになった。折釵股の具体例としては、「自言帖」(714年)(図版2)の「道」や「觀」の字に表現されている筆法がそれであろうと言われている<sup>(16)</sup>。宋の姜夔『續書譜』では、「折釵股は、その屈折の圓にして力あらんことを欲す」と述べている。

こうした張旭の狂草と相俟って、同時代には、絵画の方面でも、酒を飲んで珍しい書き方をした人物として、王墨(默)(?～804)<sup>(17)</sup>李靈省<sup>(18)</sup>張志和<sup>(19)</sup>がいるので、彼らの画法についても少しふれておきたい。唐の朱景玄『唐朝名画録』では、三人を「逸品」として位置づけており<sup>(20)</sup>例えば、王墨の書きぶりについて、次のように記している。

王墨者、……善潑墨畫山水。時人、故謂之王墨。多游江湖間、常畫山水松石雜樹。性多疎野、好酒、凡欲畫圖障先飲、醺酣之後、即以墨潑。

王墨なる者、……善く墨を潑いで山水を画く。時の人、故にこれを王墨と謂う。多く江湖の間に遊び、常に山水、松石、雑樹を画く。性多く疎野にして、酒を好み、凡そ図障に画かんと欲すれば先ず飲み、醺酩の後、即ち墨を以て潑ぐ。

さらに、唐の張彦遠『歴代名畫記』巻十には、王墨（黙）について、「風顛にして酒狂。松石山水を画く。高奇に乏しと雖も、流俗亦た好めり。酔後、頭髻を以て墨を取り、絹に抵りて画く<sup>(21)</sup>とある。酒に酔って、頭髻に墨をつけて画いていた所は、張旭との共通性が窺え、また彼らが活躍した時期もほぼ重なっていることから、絵画における狂逸な画法は、おそらく張旭らの狂草に触発されたものであったと推測される。

つまり、中唐から晩唐にかけての張旭に関する記述は、東晋の王羲之を代表とする典型的な書の伝統を逸脱するような彼の運筆の様子や、彼の書法の由来を中心に述べられており、その記述は張旭の狂逸なる草書の特異性に注目したものであるという所に特徴があると言えるだろう。

## ②懐素の狂草について

懐素（725?～785?）<sup>(22)</sup>は、字を藏真といい、永州零陵（湖南省）の人であるが、彼も伝記ははっきりとわかっていない。現在、懐素の書として伝わっているものには、「自叙帖」（777年、縦28.3×横755cm、台北故宮博物院蔵）（図版3）、「聖母帖」（792年、34.2×16.3cm、東京書道博物館蔵）、「草書千字文」（799年、26.8×278.9cm）、「藏真・律公帖」（縦26.0cm、三井文庫蔵）、「論書帖」（29.0×40.6cm、遼寧省博物館蔵）、「苦筍帖」（25.1×12.0cm、上海博物館蔵）、「過鍾帖（淳化閣帖）」、「高坐帖（戲鴻堂帖）」などがある。

唐の李肇『唐国史補』巻中に、「長沙の僧懐素草書を好み、自ら言う草聖三昧を得たりと。棄筆堆積し、山下に埋めて、号して筆塚と曰う<sup>(23)</sup>とあるように、懐素は草書を善くし、使い古した筆は山のように積もったので、山の麓に埋めて、筆塚と名付けたという。懐素は張旭より数十年余り後の人で、唐の陸羽「僧懐素傳」（『全唐文』巻四三三）によると、懐素は、直接張旭に師事し得なかったが、張旭の弟子の廓彤から張旭の筆法である「古釵股」を授かったと伝えられている<sup>(24)</sup>。彼の名は、生前から世に知られており、彼の草書について記すものは少なくなかった。唐の王邕<sup>(25)</sup>、竇冀、魯収、朱達、戴叔倫（732～789）<sup>(26)</sup>らは、いずれも「懐素上人草書歌」（『全唐詩』巻二百四、巻二七三）を作っており、任華も「懐素上人草書歌」（『全唐詩』巻二六一）を作っている。この他にも、唐の銭起（710?～780?）<sup>(27)</sup>「送外甥懐素上人歸郷侍奉」（『全唐詩』巻二三八）、唐の蘇渙（?～775）<sup>(28)</sup>「贈零陵僧」（『全唐詩』巻二五五）、唐の陸羽

（733～804?）<sup>(29)</sup>「僧懐素傳」（『全唐文』巻四三三）があり、晩唐でも、貫休（832～912）<sup>(30)</sup>「觀懐素草書歌」（『禪月集』巻六）、晩唐の韓偓<sup>(31)</sup>「草書屏風」詩（『全唐詩』巻六八二）などがある。これらの詩の中で、王邕、竇冀、魯収、朱達、戴叔倫の五首は、懐素の郷里である永州零陵県において、ほぼ同じ頃に作られたもののようであり、当時、王邕は永州の太守で、竇冀と戴叔倫は御史の官であったという。太守が出席した宴会の席において、懐素が得意の草書を揮毫し、鑑賞した名士達はその巧妙さに感服して詩を詠じたのがこれであると言われている<sup>(32)</sup>。

当時の詩人達が、「懐素上人草書歌」によって讚美した詩の句には、酒に酔い、絶叫したかと思うと、数十間の長い壁面に縦横に書きなぐったりする懐素の狂逸奔放な姿がよく描かれているが、それに最もふさわしい懐素の書である「自叙帖」<sup>(33)</sup>の末尾には、唐の張謂（?～743）<sup>(34)</sup>、盧象<sup>(35)</sup>、許瑤、李舟<sup>(36)</sup>の詩句が載せられている<sup>(37)</sup>。時期ははっきり分らないが、宋の王象之『輿地紀勝』巻五十六「唐僧懐素」によると、当時の名士三十九人が懐素に歌を詠じて贈った<sup>(38)</sup>とあるので、他にも懐素の草書を詠んだ歌詩は存在していたのかもしれない。

懐素の草書の書きぶりについては、唐の任華「懐素上人草書歌」（『全唐詩』巻二六一）に、次のように記されている。

金盆盛酒竹葉香。十杯五杯不解意。百杯已後始顛狂。一顛一狂多意氣。大叫一聲起攘臂。揮毫倏忽千萬字、……擲華山巨石以爲點、掣衡山陣雲以爲畫。興不盡、勢轉雄。

金盆に酒を盛り竹葉香ばし。十杯五杯は意を解せず。百杯已後に始めて顛狂となる。一顛一狂に意気多し。大叫一声起ちて臂を攘う。毫を揮へば倏忽として千万字、……華山の巨石を擲げて以て点となし、衡山の陣雲を掣きて以て画となす。興は盡きず、勢いは転た雄なり。

金の盆に竹葉酒がもられ、盃をかさねるうちに意識が朦朧とし、百杯から後に始めて顛狂となり、大声で叫んで筆を揮えば忽ちにして千万字を書き尽くし、時には一字二字の長さが一丈二尺になることもあったと述べている。晩唐の韓偓は、懐素の草書屏風を見て、「怪石の秋澗に奔り、寒藤の古松に掛かるがごとし。もし水畔に臨ましめば、字字恐らくは龍とならん」（『全唐詩』巻六八二「草書屏風」）<sup>(39)</sup>と述べている。

懐素の筆法について、唐の陸羽「僧懐素傳」（『全唐文』巻四三三）には、懐素自身の言葉として、次のように記されている。

貧道觀夏雲多奇峯、輒嘗師之。夏雲因風變化、乃無常勢、又無壁拆之路、一一自然。

貧道は、夏雲に奇峯多きを観て、輒ち嘗てこれを師とす。夏雲は風に因りて変化し、乃ち常の勢いなく、又た壁拆へきたくの路無くして、一一自然なり。

懷素は夏雲の変化する様子を見て、その自然らしさを書の師としたというのである。

また、晩唐に至っても、張旭と懷素の狂草をもてはやす傾向は変わらなかったようである。例えば、晩唐の貫休は、「觀懷素草書歌」（『禪月集』巻六）の中で、次のように述べている。

……金尊竹葉數斗餘、半斜半傾山衲濕、醉來把筆擲如虎、紛壁素屏不問主。……天與筆兮書大地、乃能略展狂僧意、常恨與師不相識、一見此書空歎息。

……金尊竹葉數斗の余、半ば斜け半ば傾けて山衲のうしめ濕り、酔い來りて筆を把れば擲なること虎のごとく、紛壁素屏主を問わず。……天筆を与えて大地に書く、乃ち能く狂僧の意を略展するも、常に恨むらくは師と相い識らざるを、一たびこの書を見て空しく歎息す。

懷素は、黄樽に入った竹葉酒を半分ほど飲みほし、僧衣が濕り、酔ってきて筆をとると虎のように勇猛になり、白い壁や屏に書き殴った。私（貫休）の書は、天を筆として大地に書し、狂僧（懷素）の意を展べているが、常に残念に思うのは、懷素に会ったことがないことであり、ただ懷素の草書を見て空しく歎息するだけであるという。

以上のように、中唐から晩唐にかけて、彼の狂草は既に多くの詩人達の詩に詠われていた。懷素の狂草に対する中唐の文人達の見方は、伝統的な書風を逸脱した、狂逸な草書の作家であったという点で、張旭と共通していると言えるだろう。また、唐末の高閑<sup>(40)</sup>、晔光<sup>(41)</sup>、貫休、亜棲、李霄遠<sup>(42)</sup>、景雲<sup>(43)</sup>、夢龜<sup>(44)</sup>、文楚<sup>(45)</sup>などの僧侶や、五代の楊凝式（873～954）<sup>(46)</sup>など、彼らの狂草を学ぶ者が現れ、絵画でも王墨、李靈省、張志和のように狂逸的な画法をなす者が現れたことから見て、張旭と懷素の狂草は中唐頃から既にもてはやされ、流行した書風の一つであったと考えられるのである。

## （II）北宋中期における狂草観

以上述べてきたように、中唐から晩唐にかけては、張旭や懷素の書はその草書の狂逸さについて述べているものが多く見られるが、では、北宋ではどのように捉えられていたのであろうか。ここでは、北宋の四大家の中でも、蘇軾

（1036～1101）<sup>(47)</sup>、黄庭堅（1045～1105）<sup>(48)</sup>、米芾（1051～1107）<sup>(49)</sup>の狂草観を中心に見ていくことにしよう。

### ①蘇東坡の狂草観

蘇東坡の書論は、主に彼自身の詩集である『蘇軾詩集』<sup>(50)</sup>に、凡そ二十一篇ほど収録されており、その他に、彼の文集である『蘇軾文集』巻六十九「題跋書帖」<sup>(51)</sup>に、一二七篇ほど記載されている。その中には、東坡の草書観が記されており、彼は、歴代の草書の中でも、張旭や懷素の狂草に関心を寄せていたようである。<sup>(52)</sup>

東坡は、32歳から33歳頃（1067～1068）に記した「張長史（張旭）の草書に書す」（『蘇軾文集』巻六十九）の中で、張旭の草書に対して、次のように記している。

張長史草書、必俟醉、或以爲奇、醒即天真不全。此乃長史未妙、猶有醉醒之辨。若逸少、何嘗寄於酒乎。僕亦未免此事。

張長史（張旭）の草書は、必ず酔うを俟ち、或いは以て奇と爲すも、醒むれば即ち天真ま全からず。これ乃ち長史未だ妙ならずして、猶お酔醒の弁あり。逸少（王羲之）の若ごときは、何ぞ嘗て酒に寄せんや。僕も亦た未だこの事まぬがを免れず。

張旭の草書は、酒に酔ってから書くと出来ばえが良いが、酔いから醒めると天真が十分に現れなかった。これは彼がまだ至妙の域に達しておらず、酔った時と醒めた時の調子に違いがあったということである。王羲之は酒にたよるということはあったであろうか。自分もまだこの事から免れないでいると述べている。

しかし、元豊四年（1081）、東坡が46歳の時に記した「唐氏六家の書の後に書す」（『蘇軾文集』巻六十九）では、次のように記述している。

張長史草書、頽然天放、略有點畫處、而意態自足、號稱神逸。今世稱善草書者、或不能眞行、此大妄也。眞生行、行生草。眞如立、行如行、草如走。未有未能行立、而能走者也。今長安猶有長史眞書郎官石柱記、作字簡遠、如晉宋間人。

張長史（張旭）の草書は、頽然天放たいぜんなるも、略ほ点画の処有り、而して意態は自ずから足り、号して神逸と稱す。今の世の草書を善くすと稱する者にして、或いは眞行を能くせざるは、これ大妄なり。眞は行を生じ、行は草を生ず。眞は立つが如く、行は行くが如く、草は走るが如し。未だ未だ行あるき立つこと能わずして、而も能く走る者有らざるなり。今、長安に猶お長史の眞書の郎官石柱記あり、字を作すこと

簡遠にして、晋宋の間の人の如し。

張旭の草書は、酒に酔って書かれ、自由奔放な筆致であるが、精神の躍動が十分に表現されていて、神品や逸品と称えられている。現在、草書で高く評されている人の中に、楷書や行書がうまく書けない者がいるが、これは大きな間違いである。楷書は行書から生まれ、行書から草書が生まれる。行書が書けずに草書が書けるわけがない。張旭の楷書に、「郎官石柱記」<sup>(53)</sup>があるが、簡素深遠な趣きがあり、晋宋の書のように述べている。つまり、東坡は張旭の草書を称賛すると共に、楷書の「郎官石柱記」を晋宋人に通じる趣きがあるとして高く評価し、書の基礎となる楷書の習得を指摘しているのである<sup>(54)</sup>。

元祐九年(1094)から元祐十一年(1096)、東坡が59歳から61歳頃に記したとされる「張長史(張旭)の書法に書す」(『蘇軾文集』卷六十九)には、「正に張長史、擔夫と公主と路を争うを見て、草書の法を得たれば、長史の書を学ばんと欲して、日びに擔夫に就いてこれを求むるが如し。豈に得べけんや<sup>(55)</sup>」と、張旭の筆法の得難いことを指摘している。

また、懷素については、凡そ32歳から33歳頃(1067~1068)に記した「王鞏の収むる所の藏真(懷素)の書に跋す」(『蘇軾文集』卷六十九)の中で、次のように記している。

而此公尤能自譽、觀者不以爲過。信乎、其書之工也。然其爲人儻蕩、本不求工、所以能工。此如没人之操舟、無意於濟否。是以覆卻萬變、而舉止自若。其近於有道者耶。

而してこの公は尤も能く自ら誉むるも、観る者以て過ぎたりと為さず。信なるかな、その書の工みなるや。然れどもその人と爲り儻蕩にして、本より工みなるを求めず、所以に能く工みなり。これ没人の舟を操りて、濟否に意なきが如し。ここを以て覆卻万変するも、挙止自若たり。それ道ある者に近きか。

懷素の書の自由自在な趣きを高く評価し、懷素こそ道を体得した者に近いのではないかと述べている。同じ頃に記した「懷素の帖に跋す」(『蘇軾文集』卷六十九)の中では、「懷素の書は極めて佳ならず。用筆、意趣は乃ち周越の檢劣に似たり。これ近世の小人の作る所なり。而して堯夫の弁ずる能わざるも亦た怪しむべし<sup>(56)</sup>」という。この懷素の書は極めて良くなく、周越<sup>(57)</sup>の書の劣悪なのに似ている。しかし、懷素の書はこのように俗っぽいものではないので、この書はきっと近世の人が偽作したものであろうと述べている。懷素の真跡を価値あるものとして認めようとする意識が窺えることから、やはり東坡は、彼の草書を肯定的に見

ていたと思われる。現存する東坡の書である「梅花詩帖」(図版4)に、懷素の狂草に似た書風が窺えることも、東坡が懷素の草書に深く傾倒していたことを裏付けるものであろう<sup>(58)</sup>。

つまり、東坡は張旭の狂草と楷書を高く評価し、張旭の流れをくむ懷素の狂草も認め、彼らの草書を伝統的な書の流れに通じるものとして位置づけたと捉えることができるのである。

## ②黄庭堅の狂草観

張旭や懷素の書を伝統に則ったものであるとする見方は、黄庭堅によってさらに強調されていく。

黄庭堅は、「絳本法帖に題す」(『豫章黄先生文集』卷二十八)の中で、次のように記している。

張長史郎官廳壁記、唐人正書、無能出其右者。故草聖度越諸家、無轍迹可尋。懷素見顔尚書。道張長史書意。故獨入筆墨三昧。

張長史の郎官庁壁記は、唐人の正書にして、能くその右に出づる者なし。故に草聖、諸家に度越し、轍迹の尋ぬべきなし。懷素、顔尚書(顔真卿)に見えしとき、張長史の書意を道う。故に独り筆墨の三昧に入る。

張旭の「郎官庁壁記(郎官石柱記)」は、唐人の楷書においてこれより優れているものはない。従って、草書においても、草聖として諸家を超越し、人為の痕跡が全くみられないほど優れているのであると述べている。「郎官石柱記」は開元二十九年の年号が記されており、唯一、張旭の書ではないかと評されているものであるが、黄庭堅は蘇東坡と同様に、この楷書を「張長史の書、郎官庁壁記。楷法は天下に妙なり」(『豫章黄先生文集』卷二十八「跋張長史千字文」)と、最も高く評価した。黄庭堅以外にも、宋代において、張旭の「郎官石柱記」を称賛するものは少なくなかったようである<sup>(59)</sup>。

黄庭堅は、「題顔魯公帖」(『豫章黄先生文集』卷二十八)に、「蓋し二王自り後、能く書法の極に臻る者は、惟だ張長史(張旭)と魯公(顔真卿)との二人のみ<sup>(60)</sup>」と記しているように、蘇東坡よりもさらに確固たる態度をもって、張旭の書法を王羲之以来の伝統的な書の系譜に位置づけようとしたのではないかと考えられる。

さらに、黄庭堅は「翟公巽(翟汝文)<sup>(61)</sup>所蔵の石刻に跋す」(『豫章黄先生文集』卷二十八)の中で、張旭の草書について、次のように記述している。

張長史行草帖、多出於贗作。人間張顛、未嘗見其筆墨。

遂妄作狂蹶之書、託之長史。其實張公姿性顛逸、其書字字入法度中也。楊次公家見長史真跡兩帖。天下奇書。非世間隔簾聽琵琶之比也。

張長史の行草帖、多く贋作より出づ。人、張の顛を聞くと、未だ嘗てその筆墨を見ず。遂に妄りに狂蹶の書を作し、これを長史に託す。その実、張公は姿性顛逸なるも、その書は字字法度の中に入る。楊次公（楊偕）の家に長史の真跡兩帖を見る。天下の奇書なり。世間の簾を隔てて琵琶を聴くの比に非ざるなり。

人々は張旭の風狂さを聞くだけで、その真跡を目にしたことがないので、みだりに狂蹶な書を作って張旭の名に偽託するのである。実際には張旭の人物は姿性顛逸であるが、その書は法則に則ったものであると述べている。張旭の草書が法にかなったものであると主張しているものは、他に「顔太師稱す、張長史は姿性顛逸なり」と雖も、書法極めて規矩に入ると。故に能くこれを以てその身を終えて後世に名あり。京洛間の人の、狂怪の字の右軍父子の繩墨に入らざる者を伝慕するが如きは、皆な長史の筆蹟に非ざるなり。蓋し草書の法、巫棲<sup>(62)</sup>に壊さるるなり」（『豫章黄先生文集』卷二十九「跋周子発帖」）<sup>(63)</sup>の記述などにも見られる。黄庭堅は、張旭の狂草を伝統的な書の流れに位置づけようとしたと同時に、みだりに狂逸な草書を書く者に対し、戒めを述べようとしたのではないかと考えられる。他に張旭の草書に関する記述は、「道臻師畫墨竹序」（『豫章黄先生文集』卷十六）などにも見える。

では、黄庭堅は懷素の草書に対しては、どのように評価していたのだろうか。

「絳本法帖に題す」（『豫章黄先生文集』卷二十八）の中で、次のように記している。

懷素草、莫年乃不減長史。蓋張妙於肥、藏真妙於瘦。此兩人者、一代草書之冠冕也。

懷素の草、莫年乃ち長史に減ぜず。蓋し張は肥に妙にして、藏真（懷素）は瘦に妙なり。この兩人は、一代の草書の冠冕なり。

懷素の草書は、張旭より出ているが、晩年には張旭に劣っていない。張旭は線の太い所が優れており、懷素は線の細い所が優れている。そして、この二人は唐代の草書の第一人者であると述べている。「魯公（顔真卿）の東西林の題名、宗開府の神道（宋璟碑）、永州磨崖（大唐中興頌）の諸奇書、楊少師（楊凝式）の洛中十一碑、懷素の自叙草書千余字（自叙帖）。当に集めて一と為さば、他日跋尾を為すべし」（『豫章黄先生文集』卷二十八「跋翟公異所藏石刻」）<sup>(64)</sup>というよ

うに、顔真卿の東西林題名、宋璟碑、大唐中興頌や、楊凝式の洛中十一碑、懷素の自叙帖をもし集めたならば、他日に跋尾を書こうと述べている。実際に、黄庭堅の草書には、懷素の影響を受けていると思われるものが見られることから（図版5）、実践においても、いかに懷素の狂草に深く傾倒していたのかを窺うことができる。他に懷素に関する記述は、「戲答趙伯充勸莫學書及爲席子澤解嘲」詩（『山谷詩集』卷八）、「和程德裕頌五首」（『豫章黄先生文集』卷十五）、「題韓忠獻詩杜正獻草書」（『豫章黄先生文集』卷二十六）などにも見える。

要するに、黄庭堅は張旭や懷素の草書を、王羲之以来の伝統に依拠したのものとして、高く称賛した。張旭や懷素の狂草を、書の系譜に位置づけようとする思念は、蘇東坡よりもさらに強いものであることは、文献の記載のみならず、現存する黄庭堅の草書においても知ることができる。さらに、想像を膨らませるならば、彼は張旭や懷素の狂草を通して、魏晉の人の逸気をめざし、超軼絕塵の境地に辿り着こうとしたのではないかと推測されるのである。<sup>(65)</sup>

### ③米芾の狂草観

米芾の「寶章待訪集」（『寶晉山林集拾遺』卷五）には、張旭の書として、「唐率府長史張旭四帖」「張長史虎兒等三帖」「唐張長史季明賀八清鑑等帖」「張長史千文三帖」「張長史全体千文」、また、懷素の書として「懷素詩一首」「懷素千文」「懷素書任華草書歌」「懷素草書祝融高座帖」「懷素三帖」「懷素自序」「懷素草書三幅」「唐僧懷素自序」「懷素書蕭常侍日下三帖」が記載されている。その中で、「季明賀八清鑑等帖」は、米芾が張旭の書の中で第一と推薦しているものである。<sup>(66)</sup>米芾の書論に見える狂草に対する見解の中で、特に興味深いのは、先の蘇東坡や黄庭堅らとは異なり、張旭の狂草に対しては、厳しい評価を下していることである。米芾の書論には、唐人の書を批判する内容が多く見られるが、中でも、「柳公權は歐（歐陽詢）を師として及ばざること遠く甚だし。而して醜怪惡札の祖と為す。柳公自り世始めて俗書あり」（米芾『海岳名言』）<sup>(67)</sup>と、柳公權（778～865）<sup>(68)</sup>の書を否定していた。張旭に対しては、『海岳名言』の中で、次のように記している。

唐人以徐浩比僧虔、甚失當。浩大小一倫、猶吏楷也。僧虔、蕭子雲、傳鍾法、與子敬無異。大小各有分、不一倫。徐浩爲顔真卿辟客。書韻自張顛血脉來。教顔大字促令小、小字展令大、非古法也。

唐人、徐浩を以て僧虔に比するは、甚だ當を失す。浩は大小一倫にして、猶お吏楷のごとし。僧虔、蕭子雲、鍾法を伝うること、子敬（王献之）と異なることなし。大小各おの分ありて、一倫ならず。徐浩、

顔真卿の辟客と為る。書韻は張顛の血脈<sup>よ</sup>自り来たる。顔に教うるに、大字は促<sup>ちぢ</sup>めて小ならしめ、小字は展<sup>のび</sup>して大ならしむるは、古法に非ざるなり。

徐浩(703~782)<sup>(69)</sup>の書は大小一律で、いわば吏楷(官吏の使用する楷書)のようである。王僧虔、蕭子雲は鍾繇の法を伝え、王献之と異なることはない。徐浩は顔真卿(709~785)<sup>(70)</sup>の辟客であり、書風は張旭の影響を受けている。張旭は顔真卿に書法を教えたが、古法ではないと述べている。米芾は張旭の草書を古法に合わないとして否定しているのであるが、懷素の草書に対しては、「論草書」(『寶晋英光集』補遺)の中で、次のように記している。

草書若不入晋人格、徒成下品。張顛俗子、變亂古法。……懷素少加平淡、稍到天成。而時代壓之、不能高古。草書は若し晋人の格に入らざれば、徒に下品と成る。張顛は俗子にして、古法を變乱す。……懷素は少しく平淡を加え、稍や天成に到る。而れども時代これを押し、高古なる能わず。

草書はもし、晋人の格に入ることができなければ、下品になる。張旭は俗物で、その書は古法をみだした。懷素の書には少し平淡さ<sup>(71)</sup>が加わり、次第に天成の域に達したが、時代がこれを圧殺して高古になることができなかったという。

同様の記述は、「自漣漪寄薛郎中紹彭」詩(『寶晋英光集』卷三)の中でも、見られる。

張顛與柳頗同罪、鼓吹俗子起亂離。懷素猶獠小解事、僅趨平淡、如盲醫。

張顛と柳(柳公権)とは頗る同罪にして、俗子を鼓吹して乱離を起こす。懷素は獠<sup>かつりょう</sup>、小しく事を解し、僅かに平淡に趨れども、盲醫の如し。

張旭の書は柳公権と同様に批判すべきものであり、彼らは俗人より書法を伝授し、変乱をもたらした。懷素の書には僅かに平淡さが加わったが、古法に至るまでにはいかなかったと述べている。つまり、米芾は張旭の書には否定的な見解を示しており、懷素の書に対しては僅かながら認めつつも、やはり書の伝統を踏みにじったものであるとみなしていたのである。

## 終わりに

張旭や懷素の狂草は、中唐頃から既に多くの詩人の詩に詠われ、晩唐に至るまで、その草書の狂逸さがもてはやさ

れ、その特異性が注目的となった。さらに、北宋に至ると、蘇東坡や黄庭堅らが、張旭と懷素の狂草を高く評価した。特に黄庭堅は彼らの書に深く傾倒し、自らの書においても実践を試みたのである。しかし、蘇東坡や黄庭堅とは対称的に、米芾は張旭の書を否定的に見ており、懷素の書には僅かながらの好感を示しながらも、やはり狂草を古法に悖るものであるとみなしていたようである。

蘇東坡や黄庭堅における張旭や懷素の狂草観は、それ以後の草書の発達の流れにおいても多大な影響を与えたことは間違いないだろう。

## 注

- (1) 「故爲隸草、趣急速耳」(後漢の趙壹「非草書」)。
- (2) 張芝は、酒泉の人。字は伯英、昶の兄である。草書は最も世に宝とされ、時に草聖と称された。
- (3) 中田勇次郎「草書の芸術性」(中田勇次郎『中国書論集』、二玄社、1970)。
- (4) 張旭に関する先行研究としては、外山軍治「張旭について」(『書道全集』第八卷、平凡社、1954)、中田勇次郎「張旭の書」(『書道芸術』第五卷、中央公論社、1972)などがある。
- (5) 陸柬之は、唐の蘇州吳興の人。書道史において楷書の名手の一人である虞世南(558~638)の甥にあたる。著作郎、太子司議郎に官した。少時、書を舅の虞世南に学び、晩年に王羲之や王献之を倣い、遂に歐陽詢や褚遂良と名を齊しくするに至った。
- (6) 『新唐書』卷二百二「李白傳附張旭傳」参照。
- (7) 注(4)中田勇次郎「張旭の書」、183頁。
- (8) 張旭の書については、『書道全集』第八卷(平凡社、1954)、『書道芸術』第五卷(中央公論社、1972)などを参照した。
- (9) 原文は次の通りである。「張旭三杯草聖傳、脱帽露頂王公前、揮毫落紙如雲烟」
- (10) 賀知章は、唐の浙江会稽の永興の人で、字を季真という。証聖元年(695)に進士に擢でられ、開元十三年(725)に礼部侍郎となり、正四品下に任ぜられて、玄宗の殊遇を受け、皇太子のちの肅宗の侍読にもなった。『旧唐書』「文苑伝」中に伝が見える。
- (11) 李適之は、唐の宗室で、太宗皇帝の廢太子李承乾の孫、玄宗の又いとこにあたる。『旧唐書』列伝卷四十九に記事が見える。
- (12) 崔宗之は、唐の滑州靈昌の人。名を成輔、字を行という。玄宗即位の際の功臣であった崔日用の子。『新唐書』列伝卷四十六に記事が見える。
- (13) 蘇晋は、唐の雍州藍田の人。則天武后の証聖元年(695)、賀知章と同年の進士であり、玄宗が皇太子であった頃の秘書である。最後の官は、太子左庶子、正四品上であった。『旧唐書』列伝卷五十に記事が見える。
- (14) 「旭飲酒輒草書、揮筆而大叫、以頭搥水墨中而書之。天下呼爲張顛。醒後自視、以爲神異、不可復得」
- (15) 「折釵股」とは、釵(かんざし)の股(柄)の形をとって書を書くことである。
- (16) 注(4)中田勇次郎「張旭の書」を参照した。
- (17) 王墨(默)は、唐の画人。早年、筆法を鄭虔より受け、後に項容を師とした。唐の朱景玄は、『唐朝名画録』の中で「圖出雲霞、染成風雨、宛若神巧」と評している。画蹟に「嚴光釣瀨図」「松橋図」があり、著に『宣和画譜』がある。
- (18) 李靈省は、詳しい経歴は分かっていない。唐の朱景玄『唐朝名画録』には、「以酒生思傲然自得、不知王公之尊貴。若畫山水竹樹、皆一點一抹便得其象。物勢皆出自然或爲峯雲雲際、

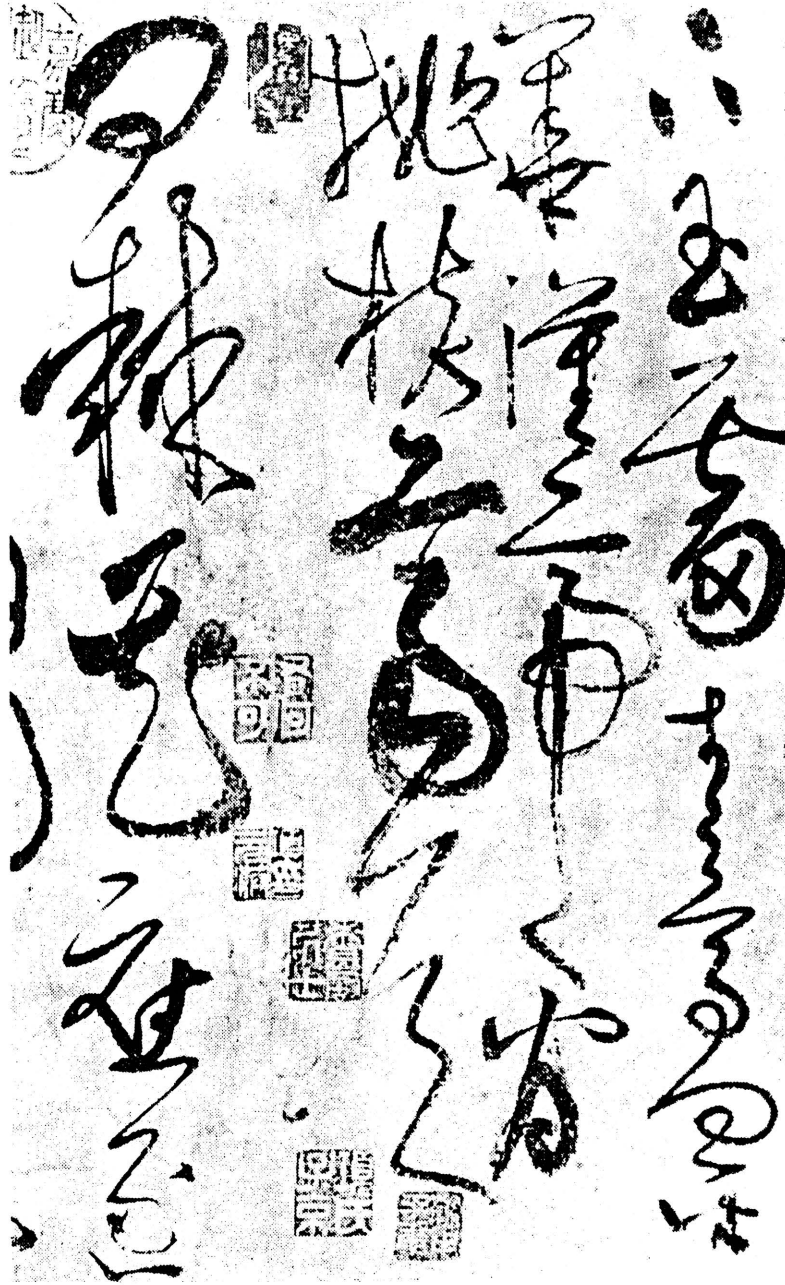


- 或爲島嶼江邊。得非常之體符造化之功、不拘於品格自得其趣爾」と記している。
- (19) 張志和は、字を子同、号を煙波子といい、浙江省金華の人。明の董其昌は、「昔人以逸品置神品之下、歷代唯張志和可無愧色」と評している。
- (20) 「逸品」の具体的内容については、中村茂夫「朱景玄の『唐朝名画録』」（『中国画論の展開』、中山文華堂、1965）を参照した。
- (21) 「風顛酒狂。畫松石山水。雖乏高奇、流俗亦好、醉後、以頭髻取墨、抵於絹畫」
- (22) 懷素に関する先行研究としては、中田勇次郎「懷素の書とその影響」（『書道全集』第十巻、平凡社、1954）、中田勇次郎「懷素の書」（『書道芸術』第五巻、中央公論社、1972）などがある。
- (23) 原文は次の通りである。「長沙僧懷素好草書、自言得草聖三昧。棄筆堆積、埋於山下、號曰筆塚」
- (24) 「……草書堅牽似古釵脚、勉旃、至晚歲、顏太師真卿以懷素爲同學鄒兵曹弟子問之曰、夫草書於師授之外、須自得之。張長史視孤蓬驚沙之外、見公孫大娘劍器舞、始得低昂迴翔之狀、未知鄒兵曹有之乎。懷素對曰、似古釵脚、爲草書堅牽之極。……」
- (25) 王邕は、唐の太原の人。玄宗の天寶年に進士となる。代宗の大歴の初めに、永州刺史に任ぜられる。
- (26) 戴叔倫は、唐の潤川金壇の人。字を幼公という。
- (27) 錢起は唐の吳興の人。字を仲文という。玄宗の天寶年間の進士。司封郎中、考功郎中などに任ぜられた。
- (28) 蘇渙については、『唐詩記事』巻二十六、『唐才子伝』巻三に記述が見える。
- (29) 陸羽は、唐の復州竟陵の人。字を鴻漸、号を竟陵子などという。
- (30) 貫休は、蘭溪の人。名を休、字を德隱、德遠という。七歳で出家し、和安寺に入り、苦節峻行、詩を善くし、羅漢を描き、篆隸草書に長じた。
- (31) 韓偓は、唐末の詩人。字を致堯という。女性の情の描写に優れ、香奩体と称された。
- (32) 中田勇次郎「唐僧懷素の書」（『中国書論集』二玄社、1970）、177頁を参照した。
- (33) 「自叙帖」は、懷素が自分の学書の経歴を述べた文章を書いた草書巻である。すべて136行ある。文章の内容は、始めに自分の書における経歴を述べた後、顏真卿が彼のために作った、「懷素上人草書歌序」を挙げ、次いで自分の書を形似、機格、疾速、愚劣の四項目に分けて論じ、懷素のために作った、当時の諸家の詩文を挙げて解説している。
- (34) 張謂は、唐の河内の人、字を正言という。玄宗天寶年間の進士。肅宗乾元中に尚書郎となる。
- (35) 盧象は、字を緯卿という。玄宗の開元年間に、補秘書郎となる。
- (36) 李舟は、唐の隴西の人。文学を好み、書を善くした。
- (37) 宋の朱長文『墨池編』や宋の陳思『書苑菁華』に積文が記載されている。
- (38) 宋の王象之『輿地紀勝』巻五十六「唐僧懷素」に、「零陵人素觀二王眞跡及二張草書、而學之書漆盤三面、俱穴贈之以歌者三十九人、皆當世名流……」とある。
- (39) 原文は次の通りである。「怪石奔秋澗、寒藤挂古松。若教臨水畔、字字恐成龍」
- (40) 高閑（生没年不詳）は、湖州烏程（浙江省）の人で、湖州開元寺に住み、後に長安に入り、薦福寺、西明寺などにおいて、経律を習得した。書をよくし、最も草書に長じ、唐五書僧の一人に数えられている。書蹟に「草書千文」「正嘉座主帖（玉烟堂帖）」「此齋破除帖（戲鴻堂帖）」などがある。
- (41) 晁光は、字を登封といい、永嘉の人である。明州国寧寺の僧で、唐五書僧の一人に数えられている。唐の吳融は「贈晁光上人草書歌」（『全唐詩』巻六八七）を記している。吳融は、唐の越州山陽の人。字を子華という。昭宗の時の進士である。
- (42) 李霄遠は、『宣和書譜』巻十八に記事が見える。
- (43) 景雲は、唐の書僧である。『宣和書譜』巻十九に記事が見える。
- (44) 夢龜は、唐の書僧で、九〇一年から九〇四年までは東林寺に寓していたという。『宣和書譜』巻十九に記事が見える。
- (45) 文楚は、書をよくし、唐の書僧として知られるのみである。『宣和書譜』巻十九に記事が見える。
- (46) 楊凝式は、字を景度、号を虚白、希維居士、癸巳人、関西老農といい、陝西省華陰の人である。唐の昭宗の時に進士となり、唐王朝の滅亡にあい、その後梁、唐、晉、漢、周と五代の各王朝に仕えた。常に、狂人を装い、楊風子（狂人）とも称された。最も行草書に工みで、顏真卿や柳公権から脱胎し、思いのままに縦逸の趣きを極めていく所に特徴がある。
- (47) 蘇軾は、字を子瞻、号を東坡という。眉州（四川省）眉山の人。父の洵、弟の轍と共に三蘇と称せられ、宋における第一流の人物として崇拜されている。宋の仁宗の嘉祐二年（1057）の進士。
- (48) 黄庭堅は、字を魯直、号を山谷という。洪州（江西省）分寧の人。治平三年（1066）の進士。熙寧五年（1072）に、北京国子監となる。同年、蘇軾が彼の詩を庭堅の妻の父にあたる孫覿の家で見て、その絶妙さを歎賞して以来、蘇軾と詩のやりとりをするようになる。
- (49) 米芾は、襄陽（湖北省）の人。字を元章、鹿門居士、襄陽漫仕と号した。宋の崇寧二年（1103）には、太常博士であった。次いで、知常州に任ぜられたが赴任せず、管句洞霄宮となり、出でて知無爲軍となったが、招かれて書画学博士となった。書のみならず、画にも長じ、米法山水の創始者である。書画の鑑識にも長じ、多くの名蹟を収蔵し、晋人の真跡書画を得たので、宝晋齋と号した。
- (50) 王文誥輯註、孔凡礼點校『蘇軾詩集（全八冊）』（中華書局、1982）。
- (51) 孔凡礼點校『蘇軾文集（全六冊）』（中華書局、1986）。
- (52) 張旭と懷素に関する記述には、「今太白集中、有歸來乎、笑矣乎及贈懷素草書數詩、決非太白作」（『全宋文』巻一九三四「書李白集」）、「近見曾子固編太白集、自謂頗獲遺亡、而有贈懷素草書歌及笑矣乎數首、皆貫休以下詞格」（『全宋文』巻一九三四「書諸集偽繆」）、「張長史、懷素得草書三昧、聖宋文物之盛、未有以嗣之、惟蔡君謨頗有法度、然而未放、止與東坡相上下耳」（『全宋文』巻一九四三「論書」）などがある。
- (53) 「尚書省郎官石記」は、「郎官石柱記」「郎官廳石記」「郎官壁記」「郎官廳壁記」などとも呼ばれている。現在見られる拓本は、その序の部分だけである。原石は、早くからなくなったようである。明の都穆は『金薤琳琅』において、「承平の時、碑は蘇学中堂の後ろにあり。已に漸く剝割す。兵火ののちまた存せず。元の商德府は、石刻はもと京兆に在り、今なし」と述べている。
- (54) 張旭の口授した筆法を記録したという、唐の顏真卿の「張長史十二意筆法」（『墨藪』）がある。顏真卿が張旭から筆法を受けたことは事実と思われるが、この書にみえる「十二意法」は真行書であって、草書の法ではないと言われている。十二の意法とは、「梁武帝觀鍾繇書法十二意」（『法書要録』巻二）に平、直、均、密、鋒、力、輕、決、補、損、巧、稱とあるのを承けたもので、これは伝統的な書法に属するものであると言われている。張旭は、叔父の陸彦遠から授かり、彦遠はこれを父の陸柬之から承けたという。中田勇次郎氏の「張旭の書」（『書道芸術』第五巻、中央公論社、1972）によれば、張旭が、後世において正統的な伝統派の中に置かれているのもこういう系統によるものであろうと論じている。
- (55) 「正如張長史見擔夫與公主爭路、而得草書之法、欲學長史書、日就擔夫求之。豈可得哉」
- (56) 「懷素書極不佳。用筆意趣、乃似周越之險劣。此近世小人所

- 作也。而堯夫不能辨、亦可怪矣」
- (57) 周越は、字を子発といい、鄒平の人である。主客郎中に官した。その書は、王羲之風の保守的な書であったという。
- (58) 蘇東坡の弟の蘇轍は、懷素の書について「世傳懷素書未有若此完者。紹聖三年三月予謫居高安、前新昌宰邵君出以相示。予雖知其奇、然不能盡識其妙。余兄和仲特善行草、時亦謫惠州、恨不令一見也。眉山蘇轍同叔記」(『全宋文』卷二〇七六「跋懷素帖」)と述べている。
- (59) 注(4) 外山軍治「張旭について」、31頁参照。
- (60) 「蓋自二王後、能臻書法之極者、惟張長史與魯公二人」
- (61) 翟公異(1076~1141)は、名を汝文、字を公異という。潤州丹陽の人。
- (62) 垂棲は、洛陽の人で、唐代五書僧の一人である。張旭の筆意を得たと評されている。
- (63) 「顔太師稱、張長史雖姿性顛佚、而書法極入規矩也。故能以此、終其身而名後世。如京洛間人、傳摹狂怪字、不入右軍父子繩墨者、皆非長史筆蹟也。蓋草書法、壞於亞棲也」
- (64) 「魯公東西林題名宋開府神道永州磨崖諸奇書、楊少師洛中十一碑、懷素自叙草書千餘字。當集爲一、它日可爲跋尾」
- (65) 黄庭堅が人間性を重視したことは、蘇東坡と似ているが、彼はさらに、禅宗的な修練を加えることに専念した。「人物を論ずるに、要はこれ韻勝ること尤も得難しと爲す。書を蓄うる者、能く韻を以てこれを觀れば、當に髣髴たるを得べし」(『豫章黄先生文集』卷二十八「題絳本法帖」)とあるように、書の中に「韻」があることを求めた。韻に注目した批評の例としては、「東坡の書は華嶽の三峰、卓立せる參昂の如し。造物の鑪錘と雖も、自ずからその妙を知らざるなり。中年の書は円勁にして韻あり」(『豫章黄先生文集』卷二十九「跋東坡書」)などがある。また、黄庭堅は「字を学んで既に成り、且つ心を養いて中に俗氣無からしむ」(『豫章黄先生文集』卷二十九「跋與張載熙書卷尾」)とあるように、俗氣を去ることを重視した。俗氣に注目した批評の例としては、「王令(王獻之)の翰墨、了に俗氣なし」(『豫章黄先生文集』卷二十八「題絳本法帖」)や、「楽毅論の旧石刻、その半ばを断軼せる者、字、瘦勁にして俗氣なし」(『豫章黄先生文集』卷二十八「跋翟公異所藏石刻」)などがある。黄庭堅は、書に「韻」を求め、「俗」を取り除いて、晋人の逸氣に辿り着こうとした。その為に、彼は草書に専念したのであるが、張旭や懷素の狂草は彼の希求する境地へと行き着くにあたり、大きな影響をもたらしたと考えられる。
- (66) 「右楮紙真蹟筆法勁古不類他書、世間季明第一書也」(米芾『寶晉山林集拾遺』卷五「寶章待訪集」)
- (67) 「柳公權師歐不及遠甚。而爲醜恠惡札之祖。自柳公世始有俗書」
- (68) 柳公權は、京兆華原縣(陝西)の人で、河東の名族柳氏の一派に属する。字を誠懸という。唐の元和初年の進士である。政治家としての功績は伝えられていないが、穆宗がその筆法を問いたのに対し、「用筆は心にあり、心正しければ筆正し」と答えたのは有名である。書道史上では、柳公權は顔真卿の第一の後継者と見られている。
- (69) 徐浩は、字を季海といい、越州(浙江省)の人である。能書で知られる嶠之を父とし、開元時代の宰相張九齡の甥にあたる。名家の出であり、家には優れた法書の数々を収蔵していたようである。
- (70) 顔真卿は、字を清臣といい、長安の人である。彼は東晋の王羲之に並ぶ書の巨匠である。現存する彼の書として、「祭姪文稿」「祭伯文稿」「争坐位帖」「顔氏家廟碑」「自書告身」など、多数存在している。
- (71) 米芾の書論の特質の一つである「平淡天成」論については、大野修作「黄庭堅の書論」(『書論』第15号、1979)、中田勇次郎「米芾の書論」(『書論』第15号、1979)などを参照した。

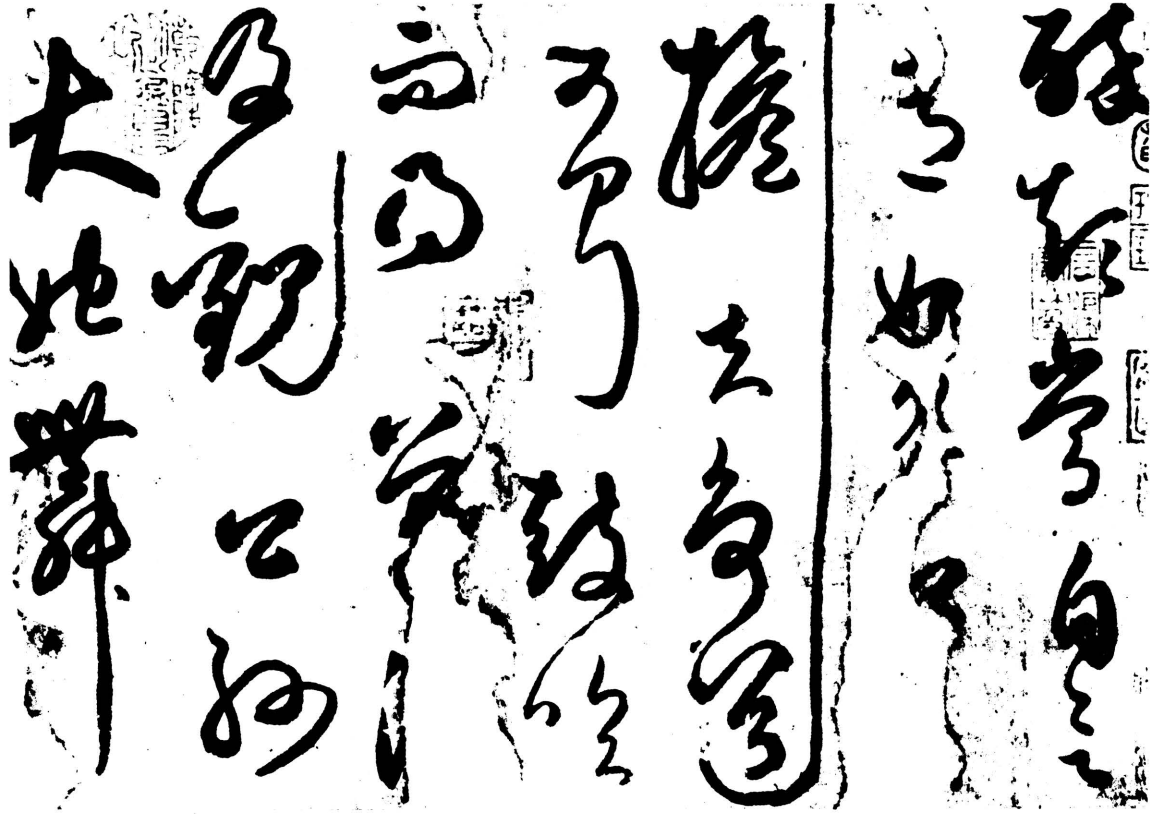
関連資料

(図版1)



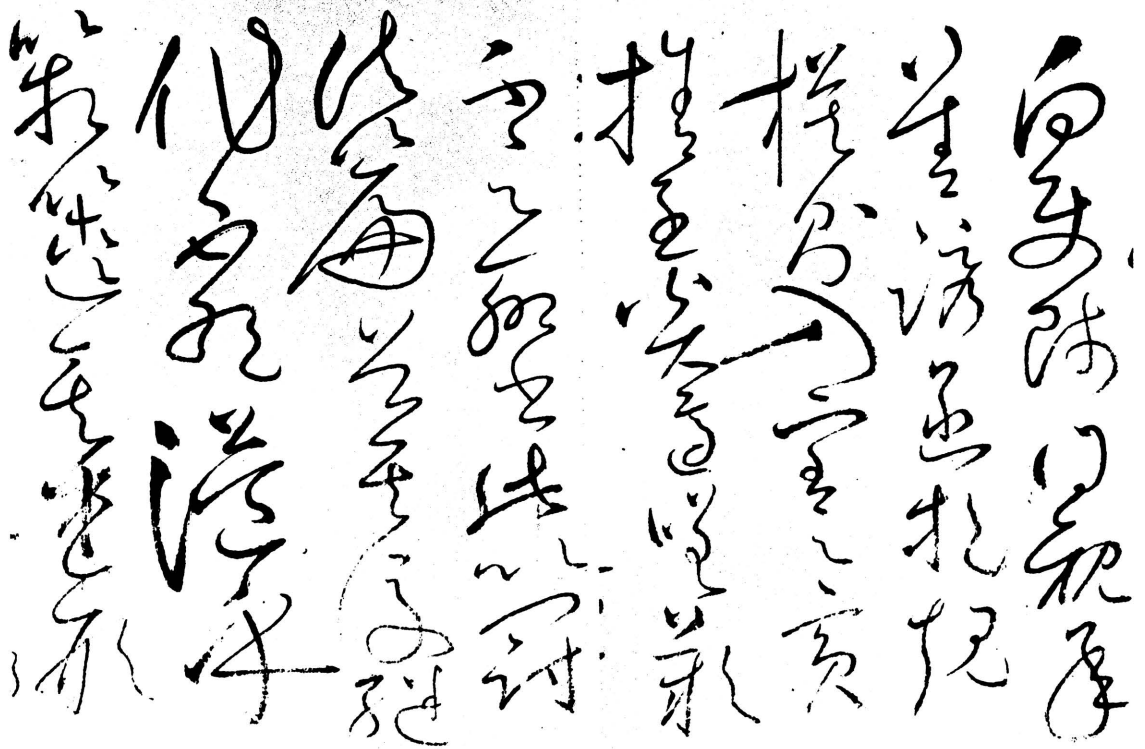
張旭「古詩四帖」(部分拡大)  
(29.1×195.2cm、遼寧省博物館蔵)

(図版 2)



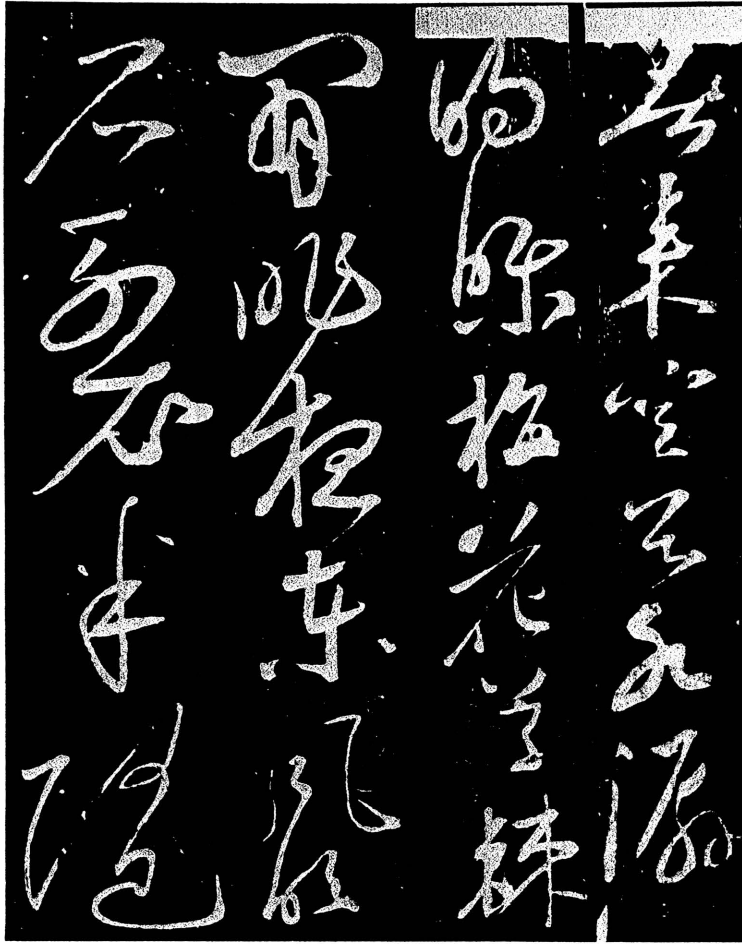
張旭「自言帖」(714年)

(図版 3)



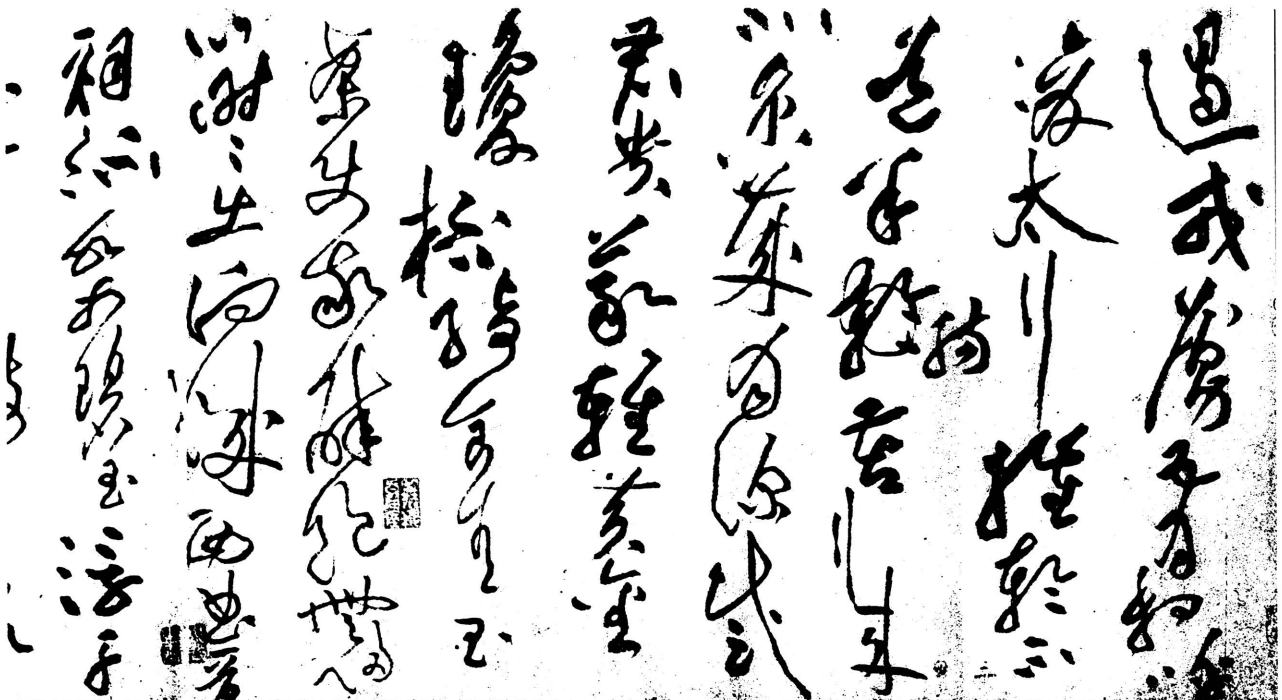
懷素「自叙帖」(777年、28.3×755cm、台北故宮博物院藏)

(图版 4)



蘇東坡「梅花詩帖（成都西樓蘇帖）」（1080年、天津市藝術博物館藏）

(图版 5)



黃庭堅「李太白憶舊遊詩卷」（1094年以後推定、37×392.5cm、京都府藤井有鄰館藏）